資料５

審　議　事　項

	件名・議案	提案者	資料 （頁）	提案理由等 （※シンポジウム等、後援関係については概要を記載）	説明者	根拠規定等
Ⅰ　審議事項						
１．規則関係						
提案1	「日本の展望２０２０検討委員会運営要綱」を改正すること	会長	B(7)	委員会の名称を「「未来からの問い」検討委員会」に変更することに伴い、運営要綱を改正する必要があるため。	会長	日本の展望２０２０検討委員会運営要綱
提案2	「日本学術会議協力学術研究団体規程」の一部改正について	科学者委員会委員長	B(9-11)	日本学術会議協力学術研究団体規程について、一部修正を行うため。	三成副会長	会則36条
２．提言等関係						
提案3	提言「物理学分野における学問分野に基づく教育研究（DBER）の推進」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	物理学委員会委員長	C-1(1-32)	物理学委員会物理教育研究分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 **※第三部査読**	物理学委員会物理教育研究分科会笹尾真実子委員長、笠潤平幹事	内規3条1項
提案4	報告「科学的知見の創出に資する可視化―文理融合研究と新パラダイム策定―」について日本学術会議会則第2条第4号の「報告」として取り扱うこと	総合工学委員会委員長	C-1(33-69)	総合工学委員会科学的知見の創出に資する可視化分科会において、報告を取りまとめたので、関係機関等に対する報告として、これを外部に公表したいため。 **※第三部査読**	総合工学委員会科学的知見の創出に資する可視化分科会小山田耕二委員長、田中覚委員、藤代一成委員	内規3条1項
提案5	提言「活力ある超高齢社会の構築に向けて－これからの日本の医学・医療、そして社会のあり方－」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	臨床医学委員会委員長	C-1(70-100)	臨床医学委員会老化分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 **※第二部査読**	臨床医学委員会老化分科会大内尉義委員長、荒井秀典幹事	内規3条1項

提案6	提言「すべての人に無償の普通教育を　多様な市民の教育システムへの包摂に向けて」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	心理学・教育学委員会委員長	C-2(1-32)	心理学・教育学委員会排除・包摂と教育分科会において、提言をとりまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 **※第一部査読**	心理学・教育学委員会排除・包摂と教育分科会志水宏吉委員長 、小玉重夫副委員長	内規3条1項
提案7	提言「「地理総合」で変わる新しい地理教育の充実に向けて―持続可能な社会づくりに貢献する地理的資質能力の育成―」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	地域研究委員会委員長、地球惑星科学委員会委員長	C-2(33-74)	地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 **※第一部査読**	地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会矢野桂司委員長、井田仁康副委員長	内規3条1項
提案8	提言「不透明化する世界と地域研究の推進-ネットワーク化による体制の強化に向けて-」について日本学術会議会則第2条第3号の「提言」として取り扱うこと	地域研究委員会委員長	C-2(75-107)	地域研究委員会地域研究基盤強化分科会において、提言を取りまとめたので、関係機関等に対する提言として、これを外部に公表したいため。 **※第一部査読**	地域研究委員会地域研究基盤強化分科会武内進一副委員長、宮崎恒二委員	内規3条1項
提案9	報告「「軍事的安全保障研究に関する声明」への研究機関・学協会の対応と論点」について日本学術会議会則第2条第4号の「報告」として取り扱うこと	科学者委員会委員長	C-2(108-210)	科学者委員会軍事的安全保障研究声明に関するフォローアップ分科会において、報告を取りまとめたので、関係機関等に対する報告として、これを外部に公表したいため。 **※科学者委員会査読**	科学者委員会軍事的安全保障研究声明に関するフォローアップ分科会佐藤岩夫委員長、藤井良一副委員長	内規3条1項

３．協力学術研究団体関係

提案10	日本学術会議協力学術研究団体を指定すること	科学者委員会委員長	B(13)	日本学術会議協力学術研究団体への新規申込のあった下記団体について、科学者委員会の意見に基づき、指定することとしたい。 ①一般社団法人日本熱電学会 ※令和2年6月25日現在2,068団体（上記申請団体を含む）	三成副会長	会則36条

４．学術フォーラム及び土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等
【令和２年度第３四半期】追加分

提案11	学術フォーラム「コロナとの共生の時代における分析化学の果たす役割」の開催について	第三部部長、化学委員会委員長	B(17-18)	主催：日本学術会議 日時：令和２年11月11日（水）13:00-17:00 場所：日本学術会議講堂及びオンライン開催 **※日本学術会議が開催主体のため、幹事会の決定が必要**	-	内規別表第1
提案12	公開シンポジウム「身体・社会・感染症―哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか―」	哲学委員会委員長	B(19-20)	主催：日本学術会議哲学委員会 日時：令和２年12月５日（土）13:30～17:00 場所：日本学術会議講堂及び会議室（状況によっては他会場ないしオンライン開催） **※第一部承認**	-	内規別表第1
５．その他のシンポジウム等						
提案13	公開シンポジウム「生命科学分野におけるジェンダー・ダイバーシティーに関する課題と今後の展望」」	第二部長	B(21-22)	主催：日本学術会議第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティー分科会 日時：令和２年８月10日（月・祝日）13:00～17:30 場所：ZOOMを用いたオンライン開催 **※第二部承認** **※第282回幹事会承認済みの公開シンポジウムについて、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みオンライン形式での開催に変更することに伴い、シンポジウムの日程を変更するもの**	-	内規別表第1
提案14	公開シンポジウム「第６回理論応用力学シンポジウム」	総合工学委員会委員長、機械工学委員会委員長	B(23-25)	主催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同力学基盤工学分科会 日時：令和２年９月１日（火）～９月３日（木）9:00～18:00 場所：オンライン開催 **※第三部承認**	-	内規別表第1
提案15	公開ワークショップ「新型コロナウィルス禍の下での持続可能な発展のための教育の推進」の開催について	フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会	B(27-28)	主催：日本学術会議フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会 日時：令和２年９月５日（土）14:00～17:00 場所：オンライン開催	-	内規別表第1
提案16	公開シンポジウム「新知見の扱いとその活用」	総合工学委員会委員長	B(29-31)	主催：日本学術会議総合工学委員会原子力安全に関する分科会 日時：令和２年９月10日（木）13:00～17:25 場所：オンライン開催 **※第三部承認**	-	内規別表第1

提案17	公開シンポジウム「口腔と全身のネットワーク　～咀嚼・嚥下と脳・神経機能の連関～」	歯学委員会委員長	B(33-34)	主催：日本学術会議歯学委員会基礎系歯学分科会 日時：令和２年９月13日（日）10:40～12:10 場所： かごしま県民交流センター（鹿児島市山下町）（状況によりオンライン開催に変更の可能性あり） **※第二部承認**	-	内規別表第1
提案18	公開シンポジウム「理数系教育とジェンダー：学校教育にできること」	社会学委員会委員長	B(35-36)	主催：日本学術会議社会学委員会ジェンダー研究分科会 日時：令和２年９月15日（火）13:30～16:30 場所：オンライン開催 **※第一部承認**	-	内規別表第1
提案19	公開シンポジウム「感覚器におけるスマートフォンの光と影」	臨床医学委員会委員長	B(37-38)	主催：日本学術会議臨床医学委員会感覚器分科会 日時：令和２年９月15日（火）14:30～17:00 場所：朝日スクエア　東京都千代田区有楽町2－5－1　有楽町マリオン11階 （状況によりオンライン開催に変更の可能性あり） **※第二部承認**	-	内規別表第1
提案20	公開シンポジウム「こころ・からだ・細胞を運動でつなぐアプローチ」	総合工学委員会委員長、機械工学委員会委員長	B(39-40)	主催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同計算科学シミュレーションと工学設計分科会 日時：令和２年９月15日（火）10:00～17:00 場所：オンライン開催 **※第三部承認**	-	内規別表第1
提案21	公開シンポジウム「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」	地域研究委員会委員長	B(41-42)	主催：日本学術会議地域研究委員会文化人類学分科会 日時：令和２年９月19日（土）13:00～15:00 場所：オンライン開催 **※第一部承認**	-	内規別表第1
提案22	公開シンポジウム「原子力総合シンポジウム」	総合工学委員会委員長	B(43-45)	主催：日本学術会議総合工学委員会原子力安全に関する分科会 日時：令和２年９月30日（水）13:00～17:10 場所：オンライン開催 **※第三部承認**	-	内規別表第1
提案23	公開シンポジウム「複合災害への備え－withコロナ時代を生きる」	防災減災学術連携委員会委員長、土木工学・建築学委員会委員長	B(47-49)	主催：日本学術会議防災減災学術連携委員会、土木工学・建築学委員会、 日時：令和２年10月３日（土）13:00～14:30 場所：オンライン開催(予定) **※第三部承認**	-	内規別表第1

提案24	公開シンポジウム「融合社会脳研究の発展へ向けて」	日本学術会議 心理学・教育学委員会委員長	B(51-52)	主催：日本学術会議 心理学・教育学委員会、日本学術会議 心理学・教育学委員会「脳と意識」分科会 日時：令和２年９月８日(火)公開（公開期間：令和３年１月３１日（日）まで） 場所：オンライン開催（事前に収録したものを公開するもの） **※第一部承認**	-	内規別表第1
提案25	公開シンポジウム「第12回基礎法総合シンポジウム：「移動・帰属・アイデンティティ―人の国際移動と国家の役割―」	法学委員会委員長	B(53-54)	主催：日本学術会議法学委員会 日時：令和２年10月31日（土）13:00～18:00 場所：オンライン開催 **※第一部承認** **※第286回幹事会承認済みの公開シンポジウムについて、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みインターネット配信に変更することとし、日程、構成等の変更を行うもの**	-	内規別表第1
提案26	公開シンポジウム「東北マリンサイエンス拠点形成事業と今後の水産研究のあり方-豊かな海へ、科学の力で-」	食料科学委員会委員長、農学委員会委員長	B(55-57)	主催：日本学術会議食料科学委員会、日本学術会議農学委員会 日時：令和２年11月13日（金）13:00～17:30 場所：東京大学伊藤記念ホール ※または日本学術会議講堂 **※第二部承認**	-	内規別表第1
提案27	公開シンポジウム「第25回 史料保存利用問題シンポジウム」	史学委員会委員長	B(59-61)	主催：日本学術会議史学委員会、日本学術会議史学委員会歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会 日時：令和２年12月19日（土）13:30～17:30 場所：駒澤大学駒沢キャンパス ※状況によってはオンライン開催に変更 **※第一部承認**	-	内規別表第1

６．後援

提案28	国内会議の後援をすること	会長	―	以下の会議について、後援の申請があり、関係する部に審議付託したところ、適当である旨の回答があったので、後援することとしたい。 <u>①第22回日本感性工学会大会</u> 主催：日本感性工学会 期間：令和２年９月９日(水)～11日（金） 場所：中央大学　後楽園キャンパス　オンライン開催（東京都文京区） 参加予定者数：約250名 申請者：日本感性工学会会長　庄司裕子 **※第三部承認**	会長	後援名義使用承認基準3(2)ウ

Ⅱ　その他

件名		資料(頁)
１．	今後の総会及び幹事会開催予定 次回幹事会は8月13日(木)13時30分開催予定	D(1)

提案１

○日本の展望２０２０検討委員会運営要綱（平成３０年１０月２５日日本学術会議第２７１回幹事会決定）の一部を次のように改正する。

改　正　後	改　正　前
●「未来からの問い」検討委員会 運営要綱 （平成３０年１０月２５日 日本学術会議第２７１回幹事会決定） （設置） 第１　「未来からの問い」検討委員会（以下「委員会」という。）は、日本学術会議会則第２５条第１項に基づく委員会として幹事会に附置する。 （略）	●日本の展望２０２０検討委員会 運営要綱 （平成３０年１０月２５日 日本学術会議第２７１回幹事会決定） （設置） 第１　日本の展望２０２０検討委員会（以下「委員会」という。）は、日本学術会議会則第２５条第１項に基づく委員会として幹事会に附置する。 （略）

附則（令和２年７月３０日日本学術会議第２９５回幹事会決定）
この決定は、令和２年７月３１日から施行する。

提案２

●日本学術会議協力学術研究団体規程（平成１７年１０月４日第１回幹事会決定）の一部を次のように改正する。

<table>
<tr><th>改　正　後</th><th>改　正　前</th></tr>
<tr><td>（略）
別表１（第２項関係）　　（学術研究団体用）
日本学術会議協力学術研究団体申込書
（略）
※貴団体が関係する学問分野は、１～３のいずれに該当するか、○印をご記入ください。（複数可）
（略）
（略）
別表３　（第２項関係）　　（学術研究団体用）
協力学術研究団体指定要件確認書
（略）
<table>
<tr><th>要件</th><th>確認</th><th>備考</th></tr>
<tr><td>（略）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(6)（注３）の基準を具備する学術に関する機関誌を継続して年１回以上発行（電子発行を含む。）していること。ただし、学術研究団体の連合体の場合は、この限りではない。</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(7)（削除）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(8)（削除）</td><td></td><td></td></tr>
</table></td><td>（略）
別表１（第２項関係）　　（学術研究団体用）
日本学術会議協力学術研究団体申込書
（略）
※貴連合体が関係する学問分野は、１～３のいずれに該当するか、○印をご記入ください。（複数可）
（略）
（略）
別表３　（第２項関係）　　（学術研究団体用）
協力学術研究団体指定要件確認書
（略）
<table>
<tr><th>要件</th><th>確認</th><th>備考</th></tr>
<tr><td>（略）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(6)人文・社会科学、生命科学又は理学・工学に関する学術の研究発表及び議論を主たる目的とする機関誌を発行していること（注３）</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>(7)機関誌は、発行の終期を予定し得ないものであること（注４）</td><td></td><td></td></tr>
</table></td></tr>
</table>

（略）

（注３）

① 人文科学、社会科学又は自然科学に関する学術の研究発表及び議論を主たる目的とするもの。次のようなものは対象外とする。

ア 予稿集、講演要旨集、会議用資料など（ただし、これらであっても、当該研究分野の特性に応じて、掲載された内容が学術論文に準じると判断される場合を除く。この場合は、そのことの説明文書を添付すること。）

イ 団体又はその構成員の消息、意見等をその団体内に報告、交換することを主たる目的とするもの

ウ 文献紹介、図書目録等単なる資料集

エ 時事を報道論議することを主たる目的とするもの

② 発行の終期を予定し得ないもの

単行本の体裁、性質を有するものは対象外とする。

③ 学術に関する団体自身が発行するものとしての形態を具備しているもの

発行人が国、特殊法人、独立行政法人、地方公共団体及び学校法人並びにこれらの設置した学校及び附属機関、出版社等であって、学術研究団体自身の発行するものとしての形態を具備していない次のようなものは対象外とする。

ア 刊行物の表紙の発行人が、△△大学××学部となっている。

イ 刊行物の表紙の発行人が〇〇学会となっていても、奥付けの部分が△△大学××学部となっているもの

④ 広告の掲載量が全紙面の３分の１を超えないもの

⑤ ①から④を具備する機関誌を原則とするが、次の機関誌については、個

(8)機関誌は、学術に関する団体自身が発行するものとしての形態を具備しているものであること（注５）		

（略）

（注３）次のようなものは該当しません。

① 予稿集、講演要旨集、会議用資料など

② 団体又はその構成員の消息、意見等をその団体内に報告、交換することを主たる目的とするもの

③ 文献紹介、図書目録等単なる資料集

④ 時事を報道論議することを主たる目的とするもの

（注４）単行本の体裁、性質を有するものは該当しません。

（注５）発行人が国、特殊法人、独立行政法人、地方公共団体及び学校法人並びにこれらの設置した学校及び附属機関、書店、出版社等であって、学術研究団体自身の発行するものとしての形態を具備していない次のようなものは該当しません。

① 刊行物の表紙の発行人が、△△大学××学部となっているもの

② 刊行物の表紙の発行人が〇〇学会となっていても奥付けの部分が△△大学××学部となっているもの

別審査の上で適切と認められる場合には、当該団体の機関誌とみなすことができる。 ア 複数の学協会が発行する合同機関誌。ただし、複数の学協会の役割を明示した書類、発行物等を審査し、当該団体の査読や著作権等に関する体制が学術研究団体として適切と認められる場合に限る。 イ 当該団体が編集し出版社等が発行する機関誌。ただし、当該団体の査読や著作権等に関する体制が学術研究団体として適切と認められる場合に限る。 ※ 「研究者」の具体的範囲は以下のとおりとする。 （略） ⑥ その他、当該研究分野について、学術論文、学術図書、研究成果による特許等の研究業績を有する者	※ 「研究者」の具体的範囲は以下のとおりとする。 （略） ⑥ その他、高度の専門性を有し、職務として研究に従事する者（①～⑤の非常勤職に就く者を含む）又は当該研究分野に関し、優れた業績を有する者

附則（令和●年●月●●日日本学術会議第●●●回幹事会決定）

この決定は、決定の日から施行する。

提案１０

日本学術会議協力学術研究団体への新規申し込み団体の概要

	団体名	概　　要
1	一般社団法人日本熱電学会 (http://www.thermoelectrics.jp/)	本団体は、熱電工学、熱電科学、及び熱電技術の普及と啓発、発展に関する事業を実施し、もって社会の発展に寄与することを目的とするものである。

４．学術フォーラム及び土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等
【令和２年度第３四半期】追加分

＜概要＞

１．日本学術会議主催学術フォーラム

(1) 経費負担を要するものは、原則として 年間 10 回程度

(2) 経費負担又は職員の人的支援を要するものは、四半期ごとに計３件まで

(3) 土日祝日開催のものは、四半期ごとに２件まで

○今回提案**【令和２年度第３四半期】　　全１件**

	提案番号	テーマ	開催希望日時	開催場所	経費負担	職員の人的支援
1	提案１１	コロナとの共生の時代における分析化学の果たす役割	令和２年１１月１１日（水）	日本学術会議講堂及びオンライン開催	要	要

２．土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等

(1) 各年度 32 回まで、及び 四半期ごとにおおむね８回

（ともに土日祝日開催の日本学術会議主催学術フォーラムを含む）

○今回提案**【令和２年度第３四半期】　全１件**

	提案番号	テーマ	開催希望日時	開催場所
1	提案１２	公開シンポジウム「身体・社会・感染症―哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか―」	令和２年１２月５日（土）	日本学術会議講堂及び会議室（状況によっては他会場ないしオンライン開催）

（参考）----------

■今回提案を含めた合計数

１．学術フォーラム（平日４件/土日３件）　全７件　　残り：３件

（内訳）※現在の７件中、７件は経費又は人的負担要

		第１四半期 （4 月～6 月）	第２四半期 （7 月～9 月）	第３四半期 （10 月～12 月）	第４四半期 （1 月～3 月）
学術フォーラム	（土日）	2	1	0	
	（平日）	2	1	1	
合計		4	2	1	

２．土日祝日に講堂を使用するシンポジウム等（学術フォーラム含む）全１４件　　残り：１８件
（内訳）

	関連部等	第１四半期 （4 月～6 月）	第２四半期 （7 月～9 月）	第３四半期 （10 月～12 月）	第４四半期 （1 月～3 月）
ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ	第一部		1	1	
	第二部	4	2		
	第三部	1	1		
	若手ｱｶﾃﾞﾐｰ		1		
	課題別				
学術フォーラム（土日）		2	1		
合計		7	6	1	

提案１１

日本学術会議主催フォーラム
「コロナとの共生の時代における分析化学の果たす役割」の開催について
（案）

１．主　催：日本学術会議

２．日　時：令和２年１１月１１日（水）１３時から１７時まで

３．場　所：日本学術会議講堂及びオンライン開催

４．分科会等の開催：分析化学分科会

５．開催趣旨：
COVID-19 が社会に与えた影響は多方面にわたる。分析化学の関わる広い分野も例外ではなく、様々な影響があり、例えば大学でのオンライン授業、企業でのテレワークの重要性（効率化、働き方改革）はそれが実践され、根付かせることの契機となり、また研究所のスマート化や実際の分析のためのオンラインでの試料のやり取りやオンラインでの立会い、更にデータの共有化の在り方等、様々な影響がある。こういった流れは今までの分析化学の関わり方を抜本的に変えてしまう可能性が高い。同時に日本でまた分析化学の分野において、今までの ICT の遅れを取り戻す良い機会ともいえる「災い転じて福となす」タイミングととらえることもできる。このコロナの時代だからこそ可能なことと可能でないことをきちんときちんと認識していくことが大事であり、そういった観点から、今後に分析化学の果たす役割を皆で議論し、新たな視点を提言する場としたい。

６．次　第：（予定、交渉中のものも含む。）
趣旨説明　齋藤公児（日本学術会議連携会員、日本製鉄）
司会　　竹内孝江（日本学術会議連携会員、奈良女子大）
　　佐藤縁　（日本学術会議連携会員、産総研）
講演①「救急現場の最前線からみた COVID-19－救命のために今後何が必要か―」
竹内一郎（横浜市大救急医学教室主任教授）（依頼済）
講演②「ポストコロナ時代の分析機器メーカーとしての目指すべき方向性」
塩田将司（日本電子経営戦略室経営企画部）（依頼済）
講演③「分析化学とロボティックス（究極のスキルフリー化・分析技術と試料前処理技術のオンライン化）」
夏目徹（産総研細胞分子工学研究部門首席研究員）（依頼中）
講演④「コロナの迅速分析体制の構築と新しいウイルス同定法の開発」
（島津製作所）（依頼予定）

講演⑤「下水でのウイルス分析から流行を１週間早く予知する研究」
本多了（水環境学会、金沢大学准教授）（依頼予定）
パネルデイスカッション
「分析化学的にコロナを考える　その果たす役割　新しい計測法とは」
ファシリテーター　玉田薫（日本学術会議連携会員、九州大学先導物質化学研究所教授）（依頼済）
パネラー　上記 5 人の講演者及び 齋藤公児（日本学術会議連携会員、日本製鉄）

（下線の講演者は、学術会議関係者）

提案１２

公開シンポジウム「身体・社会・感染症―哲学・倫理学・宗教研究はパンデミックをどう考えるか―」の開催について

１．主　催：日本学術会議哲学委員会

２．共　催：日本哲学系諸学会連合、日本宗教研究諸学会連合

３．日　時：令和２年 12 月 5 日（土）13：30～17：00

４．後　援：なし

５．場　所：日本学術会議講堂及び会議室
（状況によっては他会場ないしオンライン開催）

６．分科会等の開催：開催予定

７．開催趣旨：
イタリアの作家パオロ・ジョルダーノは次のように書いている。
「すべてが終わった時、本当に僕たちは以前とまったく同じ世界を再現したいのだろうか」。
コロナウイルスが第一に蝕むのは我々の身体だが、それを通じて、社会も大きく蝕まれる。今回のパンデミックは、新自由主義とグローバリズムの限界を露呈したと言われている。また、我々の社会が抱える根本的な不正義と脆弱性も露わになってきた。身体をもって社会に住まう我々という存在のすべてのレベルにコロナウイルスは影響を与えた。パンデミックについて、人間とは何かを問い続けてきた哲学・思想は何を語りうるのかが問われている。
また、パンデミックの「終息」と経済・社会・教育活動の「再開」という言説は、「もとにもどる」のが望ましいのだという前提を隠しもっている。それでいいのか。もとにもどることを期待するのではなく、パンデミック後（あるいは永遠に続くパンデミック中）の生き方と社会のあり方はどのようなものであるべきかをあらためて考えること、それこそが思想・哲学がなすべきことである。
パンデミックにともなって生じたさまざまな問題のうち、既存の哲学的枠組みで掬い取れるものを扱う、というやり方ではなく、哲学思想研究のやり方や枠組みじたいを変えていく必要もあるかもしれない。本シンポジウムを「パンデミック後の世界」の理念をともに構想する第一歩としたい。

８．次　第：(P)

司会：小林傳司（日本学術会議第一部会員、大阪大学 CO デザインセンター特任教授・大阪

大学名誉教授）

13:30-13:40 開会挨拶：戸田山和久（日本学術会議第一部会員、名古屋大学大学院情報学研究科教授）

13:40-14:00　報告 1　宗教研究の視点から（仮）
安藤泰至（日本学術会議連携会員 、鳥取大学医学部准教授）

14:00-14:20　報告 2　哲学の視点から（仮）
田中祐理子（京都大学白眉センター特定准教授）

14:20-14:40　報告 3　倫理学の視点から（仮）
林芳紀（立命館大学文学部准教授）

14:40-15:00　報告 4　科学ジャーナリズムの視点から（仮）
青野由利（毎日新聞社論説室専門編集委員）

休憩

15:15-15:30　コメント 1　佐倉　統　（日本学術会議連携会員 、東京大学情報学環教授）

15:30-15:45　コメント 2　吉水千鶴子（日本学術会議連携会員 、筑波大学人文社会系教授）

15:45-16:50　ディスカッション

16:50-17:00　閉会挨拶：第 25 期哲学委員会委員長（日本学術会議第一部会員 ）

９．関係部の承認の有無：第一部承認

（下線の講演者は、主催委員会・分科会委員）

以上

提案１３

※令和元年９月の幹事会において承認済みの公開シンポジウムについて、オンライン形式での開催に変更することに伴い、シンポジウムの日程を変更するもの

公開シンポジウム「生命科学分野におけるジェンダー・ダイバーシティーに関する課題と今後の展望」の開催について

１．主　催：日本学術会議第二部生命科学ジェンダー・ダイバーシティー分科会

２．共　催：なし

３．後　援：内閣府男女共同参画局、文部科学省公益社団法人日本薬学会、国立研究開発法人科学技術振興機構、一般社団法人日本看護系学会協議会一般社団法人日本医学会連合、一般社団法人日本農学会生活科学系コンソーシアム、生物科学学会連合日本生命科学アカデミー、日本農学アカデミー男女共同参画学協会連絡会
全国ダイバーシティネットワーク（予定）

４．日　時：令和２年８月１０日（月・祝日）　１３：００～１７：３０（予定）

５．場　所：オンライン形式（Zoom 利用を予定）

６．分科会等の開催：開催予定

７．開催趣旨：
医学，薬学，看護学，家政学，農学，基礎生物学など生命科学の多様な分野での現状と課題の違いを明らかにし，それぞれの分野での取り組みから各分野での課題解決の糸口を見出す。

８．次　第：（予定）
司会：　大杉 立（日本学術会議第二部会員、東京農業大学客員教授）

１３時００分～１３時０５分
開会挨拶
平井 みどり（日本学術会議第二部副部長、兵庫県赤十字血液センター所長）

１３時０５分～１３時１０分
来賓挨拶

１３時１０分～１４時００分
「日本の未来を拓くためのダイバーシティとは ～生命科学の果たす役割～」
渡辺 美代子（日本学術会議副会長、国立研究開発法人科学技術振興機構副理事長）

１４時００分～１４時４０分

※令和元年９月の幹事会において承認済みの公開シンポジウムについて、オンライン形式での開催に変更することに伴い、シンポジウムの日程を変更するもの

「生命科学分野におけるダイバーシティ推進～過去・現在・未来～」
大隅 典子（東北大学大学院医学系研究科教授）

１４時４０分～１５時１０分
「看護学系分野の男女共同参画に関わる課題とその解決に向けた取り組み（仮題）」
小松 浩子（日本学術会議第二部会員、慶應義塾大学看護医療学部学部長）

休憩　１５時１０分～１５時２０分

１５時２０分～１５時５０分
「医学系分野の男女共同参画に関わる課題とその解決に向けた取り組み（仮題）」
花岡 裕（虎の門病院消化器外科）

１５時５０分～１６時２０分
「薬学系における働き方の現状と課題～リケジョと理系男子@薬学～（仮）」
石井 伊都子（千葉大学病院薬剤部長）

１６時２０分～１６時５０分
「真の男女共同参画とは（仮題）」
小川 宣子（中部大学応用生物学部教授）

１６時５０分～１７時２０分
「農学系分野の男女共同参画に関わる課題とその解決に向けた取り組み（仮題）」
熊谷 日登美（日本学術会議第二部会員、日本大学生物資源科学部教授）

１７時２０分～１７時３０分
閉会の辞
名越 澄子（日本学術会議第二部会員、埼玉医科大学総合医療センター消化器・肝臓内科教授）

９．関係部の承認の有無： 第二部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

提案１４

公開シンポジウム
「第６回理論応用力学シンポジウム」の開催について

１．主　催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同
　　力学基盤工学分科会

２．共　催：公益社団法人日本工学会，公益社団法人応用物理学会、公益社団法人化学工学会、公益社団法人地盤工学会、公益社団法人土木学会、公益社団法人日本応用数理学会、一般社団法人日本風工学会、一般社団法人日本機械学会、公益社団法人日本気象学会、一般社団法人日本計算工学会、一般社団法人日本建築学会、一般社団法人日本原子力学会、一般社団法人日本航空宇宙学会、公益社団法人日本材料学会、公益社団法人日本地震工学会、一般社団法人日本数学会、公益社団法人日本船舶海洋工学会、公益社団法人日本伝熱学会、一般社団法人日本物理学会、一般社団法人日本流体力学会、一般社団法人日本レオロジー学会、公益社団法人農業農村工学会、日本計算数理工学会、日本混相流学会（予定）

３．協　賛：公益社団法人自動車技術会

４．日　時：令和２年９月１日（火）～９月３日（木）9:00～18:00

５．場　所：オンライン開催

６．分科会の開催：開催予定なし

７．　開催趣旨：　古典力学は、機械工学におけるいわゆる４力学（機械力学・材料力学・流体力学・熱力学）のように、工学分野ごとに確立された基盤学問のように捉えられがちであるが、工学が対象とする分野の拡大にともない、理論モデルが構築されていない未解決の力学の問題が顕在化している。これら諸課題に取り組むためには、既存の基盤学問領域の枠にとらわれない広範囲な学問分野との融合が必要であり、この融合の流れを牽引する優れた若手研究者の育成や発掘が不可欠である。このような認識に立脚し我が国の力学基盤工学を牽引する若手研究者によるシンポジウムを開催する。古典力学研究の裾野を広げうる先端的研究に関する最新動向を俯瞰すると同時に、古典力学を基盤とする研究者が異分野と協働して新たに開拓すべき次世代力学研究を展望・討論する。また、学生や若手研究者の参加により、力学研究の次世代の担い手を鼓舞するものとする。

８．次　第：
第１日：9 月１日（火）

司会： 高木　周（東京大学大学院工学系研究科教授）
9:00　開会の挨拶
高田　保之（日本学術会議連携会員、九州大学大学院工学研究院教授）
9:10-10:50　セッション 1-1　固体・流体・熱力学関連分野(1)
講演者（調整中）
11:00-12:40　セッション 1-2　固体・流体・熱力学関連分野(2)
講演者（調整中）
13:30-15:30　セッション 1-3　固体・流体・熱力学関連分野(3)
講演者（調整中）
15:40-17:40　セッション 1-4　固体・流体・熱力学関連分野(4)
講演者（調整中）
第 2 日：9 月 2 日（水）
9:00-10:40　セッション 2-1　熱流体・固体力学関連分野
真田俊之（静岡大学工学部准教授）Force acting on a pair of clean bubbles rising in line，他
10:50-12:30　セッション 2-2　熱流体力学関連分野
杵淵郁也（東京大学大学院工学系研究科准教授）Application of the low-variance Monte Carlo method to the analysis of highly non-equilibrium evaporating gas flows，他
13:30-15:30　セッション 2-3　固体・流体力学関連分野
小林宏充（慶応義塾大学法学部教授）Two-way coupled dynamics in quantum turbulence of superfluid helium，他
15:40-17:40　セッション 2-4　固体・界面力学関連分野
奥村大（名古屋大学大学院工学研究科教授）Buckling and postbuckling of pattern evolution from dimples to labyrinth，他
第 3 日：9 月 3 日（木）
9:00-10:40　セッション 3-１　ナノ・マイクロ・マクロ複合力学
垂水竜一（大阪大学基礎工学研究科教授）Geometrization of solid mechanics，他
10:50-12:30　セッション 3-2　高速流体現象・地震関連力学
山西陽子（九州大学大学院工学研究院教授）Emerging functions of electrically-induced bubbles，他
13:30-15:30　セッション 3-3　融合力学分野（2）
藤原宏志（京都大学情報学研究科准教授）Theoretical numerical analysis and computation of light propagation in biomedical tissue，他
15:40-17:40　セッション 3-4　全体討論

講演者（調整中）

17：40　閉会の挨拶

岸本　喜久雄（日本学術会議連携会員、東京工業大学名誉教授）

17：50　閉会

９．関係部の承認の有無：第三部承認

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

※ 今後の状況によっては公開シンポジウムを中止・延期・開催方法変更の可能性あり

提案１５

公開ワークショップ
「新型コロナウィルス禍の下での持続可能な発展のための教育の推進」

１．主　催：日本学術会議フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会

２．共　催： 未定

３．後　援：地理学連携機構（予定)、日本 ESD 学会（予定)、ESD 活動支援センター（予定)、特定 NPO 法人 ESD-J（予定)、公益財団法人ユネスコアジア文化センター（予定）

４．日　時：2020 年 9 月 5 日（土）14:00～17:00

５．場　所：Zoom によるオンライン会議

６．分科会等の開催：あり（ワークショップの前、12:50～13:50）

７．開催趣旨：
当分科会は地球環境に関る教育を推進する上で不可欠な、学術研究と教育の協働と交流の推進に努めており、その一環として、『学術の動向』2020 年 7 月号に特集「学校教育と ESD・SDGs・フューチャー・アース」を掲載する。これは学校教育の現場からの情報や意見を学術会議での活動に反映させるために当分科会に設置された「ESD・SDGs 小委員会」と「持続可能な発展のための海洋教育と人材育成小委員会」の活動の成果の一部を紹介するものである。掲載された報告は持続可能な発展のための教育についての最新の知見と情報を提供しているが、原稿執筆の時期がコロナ禍の初期段階に重なったため、コロナ禍を踏まえた議論には至っていない。周知のとおり我が国でもコロナ禍は既に社会に甚大なダメージと様々な影響を与えており、終息までには更なる事態の悪化が避けられない状況である。そのような中にあり、持続可能な世界の実現に向けた諸活動にも、コロナ禍を正確に把握するとともに、それぞれの立ち位置と課題を再確認し、進むべき道を見定めることが求められている。本ワークショップは、分科会委員と現場教員からの報告をもとに、それらの課題について学校の教員・生徒、学生を含む参加者全員で、オンライン会議ツールの Zoom を用いて多角的に考えるものである。

８．次　第：
総合司会：鈴木康弘（日本学術会議連携会員、名古屋大学減災連携研究センター教授）
14:00～14:10　開会挨拶・趣旨説明

氷見山幸夫（日本学術会議連携会員、北海道教育大学名誉教授）

14:10～14:25　報告１「コロナ禍を踏まえた ESD/SDGs の新たな展開」

鈴木克徳（持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）理事、前 ESD 活動支援センター副センター長）

14:25～14:40　報告２「コロナ禍を踏まえた ESD/SDGs を実践する視点と戦略」

及川幸彦（東京大学海洋教育センター主幹研究員）

14:40～14:55　報告３「コロナ禍を踏まえた小学校における ESD/SDGs 授業実践」

佐々木哲弥（東京都杉並区立西田小学校研究主任）

14:55～15:10 報告４「コロナ禍を踏まえた食の教育」

小金澤孝昭（日本学術会議特任連携会員、宮城教育大学名誉教授）

15:10～15:25 報告５「コロナ禍とスーパーグローバルハイスクール（SGH）」

硤合　宗隆（玉川学園教諭（高校公民・中学社会））

15:25～15:35　（休憩）

15:35～15:50　報告６「コロナ禍を踏まえた海洋教育における教材開発」

日置　光久（日本学術会議連携会員、東京大学海洋教育センター特任教授）

丹羽　淑博（東京大学海洋教育センター特任准教授）

15:50～16:05　報告７「コロナ禍を踏まえたマイ・ウニ飼育からの海の学び」

小川　博久（千葉県君津市立北子安小学校校長）

16:05:～16:55　ディスカッション

司会：山口しのぶ（日本学術会議連携会員、東京工業大学学術国際情報センター教授）

コメンテーター：小松輝久（日本学術会議特任連携会員、公益社団法人日本水産資源保護協会技術顧問）

福士健介（日本学術会議連携会員、東京大学未来ビジョン研究センター教授）

16:55～17:00　閉会挨拶

花木　啓祐（日本学術会議連携会員、東洋大学情報連携学部教授）

９．関係部の承認の有無：フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会承認予定

１０．申し込み方法・連絡先：中学生以上ならだれでも参加できます。申込みは下記へ：

鈴木康弘（日本学術会議連携会員、名古屋大学減災連携研究センター教授）

E-mail: resilience.nagoya@gmail.com　Tel:052-788-6037

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

提案１６

公開シンポジウム「新知見の扱いとその活用」の開催について

１．主　催：日本学術会議 総合工学委員会原子力安全分科会

２．日　時：2020 年９月 10 日（木）13:00～17：25

３．場　所：オンライン開催

４．分科会の開催：開催予定なし

５．開催趣旨：

原子力安全分科会及び福島第一原発事故調査に関する小委員会では、福島原子力発電所事故の直接原因となった津波について、どれだけの関連する知見が、事前に、学会、行政、産業界に蓄積されていたか、それが事故発生防止にどれだけ活用されたかの検討を行ってきた。その成果の一つとして、報告「我が国の原子力発電所の津波対策 ―東京電力福島第一原子力発電所事故前の津波対応から得られた課題―」を 2019 年５月に公表した。

その後も新知見の扱い、あるいはその活用が私たち社会にとって大変重要であるとの見地から検討を重ねてきた。その結果、原子力分野の安全対策だけでなく広く各種工学システム、社会システムの多様な場面において、従来必ずしも新知見が有効に活用されてこなかったのではないかとの結論に至った。そこで、原子力に特化することなく広く工学システムを網羅して新知見の活用のあり方に関して検討を進めることとした。

一方、日々大量に世に出てくる新知見の扱いについては十分な見極めが必要である。具体的には、新知見が、真の知見なのか、永久的なものなのかについては歴史の検証を待たなければならない。しかし、場合によっては歴史の検証を待つ余裕がない場合もあることも事実である。いずれにしても、新知見の活用は、原子力の安全対策だけでなく、諸分野における安全管理、あるいは科学技術イノベーション、社会システム変革等多くの分野で波及効果が期待されるのは確かである。

シンポジウムではこれらの話題を網羅することを念頭におき、広い分野の専門家に講演者としてお願いした。

６．次第（案）：
開催挨拶　13:00～13:10
日本学術会議 総合工学委員会委員長
吉村　忍（日本学術会議第三部会員、東京大学大学院工学系研究科教授）

挨拶：本シンポジウムの趣旨　13:10～13:20
日本学術会議 総合工学委員会原子力安全分科会委員長
矢川　元基（日本学術会議連携会員、公益財団法人原子力安全研究協会会長、東京大学・東洋大学名誉教授）

講演セッション　13:20～16:20
司会：松岡　猛（日本学術会議連携会員、宇都宮大学地域創生推進機構非常勤講師）

講演 1　「知識の時代から知恵の時代へ」
講演者：福田　収一（慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科顧問）

講演 2　「新知見への対応-原子力規制の現場から」
講演者：櫻田　道夫（原子力規制庁原子力規制技監）

講演 3　「柏崎刈羽安全審査における新技術導入の事例と今後について」
講演者：玉井　俊光（東京電力ホールディングス株式会社原子力運営管理部部長）

講演 4　「新知見は航空安全にどのように活用されるのか～型式証明の視点から」
講演者：鈴木　真二（日本学術会議連携会員、東京大学未来ビジョン研究センター特任教授）

講演 5　「科学技術イノベーションとエマージングリスク」
講演者：岸本　充生（大阪大学 データビリティフロンティア機構ビッグデータ社会技術部門教授）

休憩　15:10～15:20

講演 6　「未定」
講演者：高橋 真理子（朝日新聞科学医療部科学コーディネーター）

講演 7　「未定」
講演者：日本放送協会（NHK）解説委員

講演 8　「科学技術を社会の中で考える」
講演者：佐倉　統（日本学術会議連携会員、東京大学大学院 情報学環・学際情報学府教授）

休憩　16:20～16:30

パネルディスカッション 16:30～17:20
「新知見の扱いとその活用はいかにあるべきか」

司会：関村 直人（日本学術会議連携会員、東京大学副学長、東京大学大学院工学系研究科教授）
パネリスト：各講演者　及び
宮野　廣　（元法政大学大学院デザイン工学研究科客員教授）
吉田　至孝（福井大学附属国際原子力工学研究所客員教授）
吉村　忍　（日本学術会議第三部会員、東京大学大学院工学系研究科教授）

閉会挨拶　17:20～17:25

７．関係部の承認の有無：第三部承認

※ 今後の状況によりシンポジウム中止・延期・開催方法変更の可能性あり

（下線の登壇者等は、主催分科会委員）

提案１７

公開シンポジウム「口腔と全身のネットワーク　～咀嚼・嚥下と脳・神経機能の連関～」の開催について

１．主　催：日本学術会議歯学委員会基礎系歯学分科会

２．共　催：歯科基礎医学会

３．後　援：日本生命科学アカデミー（予定）

４．日　時：令和２年９月１３日（日）　10:40～12:10

５．場　所： かごしま県民交流センター（鹿児島市山下町）
（新型コロナウイルスの感染拡大防止を考慮し、開催方法が変更されることがあります。）。

６．分科会の開催：開催予定

７．開催趣旨：
日本学術会議第 2 部（生命科学）に属する歯学委員会の第 24 期のテーマは「口腔からの先制医療をめざす口腔科学研究の展開」です。出生から死に至るまで各ライフステージに応じた口腔先制医療のための口腔科学研究を発展させることを目指しています。全ライフステージに渡って健康を維持するためには、食べる・話すといった口腔機能の維持が生涯にわたって不可欠です。咀嚼・嚥下などの口腔機能の低下は、全身的な栄養障害のみならず心身機能・脳機能の低下につながり、大幅な QOL の低下を引き起こすことになるため、口腔機能低下の予防や回復は健康長寿を目指す上で重要な因子と考えられます。中でも嚥下や口腔感覚などの口腔機能と高次脳機能との複雑な連関の解明は、効果的な治療・介入・予防法や口腔機能評価・回復のためのデバイス開発につながり、口腔フレイル、さらには認知症予防指針の確立につながることが期待されます。これからの口腔科学研究では、口腔機能と全身機能、さらには口腔疾患と全身疾患の関連を分子および細胞レベルで科学的に実証していかなければなりません。今期の日本学術会議歯学委員会基礎系歯学分科会では、歯科基礎医学会

学術大会の場をお借りして、「口腔と全身のネットワーク」という観点から、新進気鋭の研究者によるシンポジウムを企画しております。今回は、咀嚼・嚥下などの口腔機能と脳・神経機能が相互に及ぼす影響を考える上で重要な神経科学的解析を理解するために、「咀嚼・嚥下と脳・神経機能の連関」と題して日本学術会議シンポジウムを企画しました。本シンポジウムでは、先駆的に活躍している３名の研究者に、神経科学的アプローチによる口腔機能評価を基盤とした口腔と脳・神経ネットワークの連関についてご講演いただき、口腔科学研究を推進し、口腔先制医療への展望を築くことを目指します。

８．次第：

日本学術会議公開シンポジウム

口腔と全身のネットワーク　～咀嚼・嚥下と脳・神経機能の連関～

座長：後藤多津子（日本学術会議連携会員、東京歯科大学　歯科放射線学講座教授）

座長：井上富雄　（昭和大学歯学部・口腔生理学講座・教授）

オーバービュー

岩田幸一（日本学術会議連携会員、日本大学・歯学部・口腔生理学講座・教授）

1. 口腔機能と脳機能の連関に迫る最先端神経科学アプローチ（仮題）

上阪 直史（東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・認知神経生物学分野教授）

2. 咀嚼機能を支える神経基盤

中村 史朗（昭和大学・歯学部・口腔生理学講座・准教授）

3. 咀嚼運動による脳機能制御機構

小野 岳人（東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・分子情報伝達学分野・助教）

座長まとめ

（下線の講演者等は、主催分科会委員）

９．関係部の承認の有無：第二部承認

提案１８

公開シンポジウム「理数系教育とジェンダー：学校教育にできること」
の開催について

１．主　催：日本学術会議社会学委員会ジェンダー研究分科会

２．共　催：日本機械学会 LAJ 委員会（Ladies’Association of JSME）

３．後　援：男女共同参画学協会連絡会(EPMEWSE)
人文社会科学系学協会における男女共同参画推進連絡会（GEAHSS）
協力：女子の理系進路選択拡大に向けた STEM 分野の新たな高大接続モデル
(JSPS:19H01730))

４．日　時：令和２年９月１５日（火）１３：３０～１６：３０

５．場　所：オンライン開催

６．分科会等の開催：なし

７．開催趣旨：日本社会のジェンダー平等に向けた歩みは遅く、さまざまな領域で活躍する女性は依然として少ない。とりわけ理系分野の専攻や職業の女性割合は低く、事態改善は政策的課題として位置づけられた。以来 10 年以上が経過し、科学技術人材としての女子・女性の育成を強調する諸事業が実施されてきたものの、教育におけるジェンダー平等の問題であるという視点は弱い。初等中等教育段階における正規の教育課程である算数・数学教育や理科教育が変わらないままに、理系分野の女性増加政策を展開しても限界があることは、先行して実施してきた欧米から学べることである。成功していない背景として、（西洋白人）男性がつくりあげてきた＜科学＞に女性を“fit-in”させる施策・方法がとられてきたことが挙げられ、科学のあり方に再編をせまっている。こうした視点は、学術研究にとどまらず学校教育の問題としても議論され、中立で客観的な教科とされる「科学」や「数学」のあり方（学習内容、教材選択、授業方法、学習方略等）をジェンダーの視点でとらえ直す研究や実践が多くみられる。日本ではこれらの研究蓄積は浅いが、ないわけではない。そこで、本シンポジウムでは、日本の理数系教育とジェンダーに関する先駆的研究や実践の報告を踏まえつつ、他分野の実践や研究に詳しい有識者を交えてともに考察する。フェミニズムが科学教育に与えた欧米の経緯にも詳しい算数・数学教育と理科教育の識者を招いて、学校教育にできることを広く議論し発信することが、本シンポジウム開催の趣旨である。

８．次　第：
総合司会　天童睦子（日本学術会議連携会員、宮城学院女子大学一般教育部教授）
13：30　開会挨拶
遠藤薫（日本学術会議第一部会員、学習院大学法学部教授）
趣旨説明
河野銀子（日本学術会議連携会員、山形大学学術研究院教授）

13：50　理数系教育の研究と実践

瀬沼花子（玉川大学教育学部教授：数学教育学）

稲田結美（日本体育大学児童スポーツ教育学部教授：理科教育学）

栗山恭直（山形大学学術研究院教授：化学・化学教育）

（休憩５分）

14：55　他分野からのコメント

山西陽子（日本学術会議連携会員（第３部）、九州大学工学研究院機械工学部門流体医工学教授）

井谷惠子（日本学術会議連携会員、京都教育大学教育学部名誉教授：体育科教育学）

小浜正子（日本学術会議連携会員、日本大学文理学部教授：アジア史）

（休憩５分）

15：45　総括討論

16：25　閉会挨拶　宮崎恵子（日本学術会議連携会員、海上技術安全研究所国際連携センター副センター長）

９．関係部の承認の有無：第一部承認

（下線の講演者は、主催分科会委員）

提案１９

公開シンポジウム「感覚器におけるスマートフォンの光と影」の開催について

１．主　催：日本学術会議臨床医学委員会感覚器分科会

２．共　催：一般社団法人日本耳鼻咽喉科学会、公益財団法人日本眼科学会

３．後　援：なし

４．日　時：令和２年９月１５日（火）１４：３０～１７：００

５．場　所：朝日スクエア　東京都千代田区有楽町 2－5－1　有楽町マリオン 11 階

６．分科会の開催：開催予定あり

７．開催趣旨：

新型コロナウイルス感染症の流行により、スマートフォンをはじめとした IT 機器の利用率が急速に高まっている。いわゆる三密回避対策のため、リモートワーク、リモート学習のスタイルが急速に普及したことと、外出自粛生活によって IT 機器でのゲーム遊びや動画視聴などの機会が急増しているためである。それに伴い、特に学生や働き盛り世代での感覚器障害の増加が懸念される事態になっている。長時間のスマートフォン使用は、近視、斜視、眼精疲労などの視覚障害のリスクとなることが知られてきており、聴覚障害に関しては、ヘッドフォンの過度な使用による「隠された難聴」と呼ばれる疾患概念が注目されてきている。

一方、超高齢社会を迎え、人々が豊かな生活を送るうえで、感覚器の重要性がますます注目されている。感覚器障害が進行すると、日常生活動作が困難になるばかりか、人と人とのコミュニケーション能力が低下することで認知症の大きな要因になることも知られている。我々の日常にすっかり浸透した便利なスマートフォンは、若者からお年寄りまで今や生活必需品となっているが、見る力や聞く力の低下した人であっても、スマートフォンなどの IT 機器を最大限に活用することで、生活の質（QOL）を高めることが可能となる。

本講演会では、超高齢社会、そして With コロナ・Post コロナの社会におけるスマートフォンなど IT 機器との上手な付き合い方を、「見る・聞く」を専門とする医師の立場から、最新の情報に基づきご紹介させていただきたい。

８．次　第：(予定)

14:30　開会挨拶

村上　信五（名古屋市立大学名誉教授、日本耳鼻咽喉科学会理事長）

14:40　講演・質疑応答

座長：伊藤　壽一（滋賀県立総合病院研究所所長）

寺﨑　浩子（名古屋大学未来社会創造機構特任教授、日本眼科学会理事長）

14:40～15:10　テーマ１：スマートフォン・携帯音楽プレーヤーと騒音性難聴
　　演者：小森　　学（聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科講師）

15:10～15:40　テーマ２：スマートフォンなどの近業による近視への影響
　　演者：大野　京子（東京医科歯科大学眼科教授）

＜休憩＞

15:50～16:20　テーマ３：難聴補助具としてのスマートフォン
　　演者：山本　典生（京都大学耳鼻咽喉科准教授）

16:20～16:50　テーマ４：視覚障害者の補助具としてのスマートフォン
　　演者：三宅　　琢（公益社団法人 NEXT VISION 理事）

16:50　閉会挨拶
　　石橋　達朗（九州大学副学長）

９．関係部の承認の有無：第二部承認

１０．備考
新型コロナウイルス感染症への対応として、間隔を空けた座席配置、会場換気、参加者の検温など、講演会場のガイドラインに従って運営いたします。
また、感染症の再流行によって Web 開催への変更、あるいは中止となる可能性もございます。

（下線の登壇者等は、主催分科会委員）

提案２０

公開シンポジウム
「こころ・からだ・細胞を運動でつなぐアプローチ」の開催について

１．主　催：日本学術会議総合工学委員会・機械工学委員会合同
計算科学シミュレーションと工学設計分科会

２．共　催：一般社団法人可視化情報学会、一般社団法人日本応用数理学会、一般社団法人日本機械学会、 一般社団法人日本計算工学会、一般社団法人日本シミュレーション学会、日本身心一体科学研究会

３．後　援：公益社団法人日本自動車技術会

４．日　時：令和２年９月 15 日（火）10：00～17：00

５．場　所：オンライン

６．分科会等の開催：開催予定
（心と脳など新しい領域検討小委員会の開催　12:10～12:40）

７．開催趣旨：このシンポジウムでは、人間が動く原理といのちの単位である細胞がもつ凄い動的システムを紹介するとともに、変革の時代における人材育成についても議論する。

８．次　第：
10:00-10:45　講演「Understanding of the self-assembly processes regulating actin and microtubule network architecture」
Manuel Théry (University of Paris-Diderot, France)
10:45-11:30　講演「Physical mechanisms of phase separation」
Anthony Hymann (Max Planck Institute)
11:30-12:00　講演「細胞と身体をつないで「自分を知る」身心一体科学教育の実践」
清水　美穂（東京農工大学工学府客員准教授）

13:00-13:05　挨拶　越塚　誠一（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学研究科教授）
13:05-13:15　講演「心と脳など新しい領域検討小委員会」について
萩原　一郎（日本学術会議連携会員、明治大学研究・知財戦略機構特任教授）
13:15-13:20　来賓挨拶　文部科学省（調整中）
13:20-13:25　来賓挨拶　厚生労働省（調整中）

13:25-13:45　講演　「ロボットと人間の運動モデルの数理と計算」
中村　仁彦（東京大学大学院工学系研究科特任研究員、東京大学名誉教授）
13:45-14:05　講演　「Taiji (Tai Chi) and Advanced Technology for Smart Health」
Yanxi Liu (Penn State University 工学部教授)
14:05-14:25　講演　「ロボットと人間の運動」
國吉 康夫　（日本学術会議連携会員、東京大学大学院情報理工学系研究科教授）
14:15-15:35　講演　「脳に内在する身体と重力」
菊池　吉晃（東京都立大学人間健康科学研究科客員教授、東京都立大学名誉教授）
15:35-15:55　講演　「適応分子がつなぐ細胞と人間の運動」
跡見　順子　（日本学術会議特任連携会員、東京農工大学工学府客員教授・東京大学名誉教授）
15:55-16:25　講演　「変動する時代に必要な人材育成」　＊調整中
吉川　弘之　（元日本学術会議会長、東京国際工科専門職大学学長、元東大総長）

16:25-16:55　講演　「社会実装/教育の具体例」　＊調整中

16:55-17:00　閉会の挨拶
跡見　順子（日本学術会議特任連携会員、東京農工大学工学府客員教授・東京大学名誉教授）

９．関係部の承認の有無：第３部

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

提案２１

公開シンポジウム
「コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」の開催について

１．主　催：日本学術会議地域研究委員会文化人類学分科会

２．共　催：日本文化人類学会、日本学術会議統合生物学委員会自然人類学分科会、
日本学術会議地域研究委員会地域研究基盤分科会

３．後　援：日本人類学会

４．日　時：令和２年９月 19（土）13：00～15：00（予定）

５．場　所：オンライン開催

６．分科会等の開催：開催予定

７．開催趣旨：
世界保健機関によって、Covid 19 感染症（以下、コロナ）がパンデミックと認定された後、我が国でも緊急事態宣言が出されるなど、社会生活に大きな変化をもたらした。多くの研究者が働く場である大学は 2020 年度前期の授業を全面的にオンライン化するなど、教育研究にもコロナ禍は影響を与えている。本シンポジウムでは、大学の文化人類学及び関連分野の研究者が直面している問題の一つとして、フィールドワーク教育を今後どう行っていくか、について検討する。海外はもとより国内の移動も制限された状況のなかで、例えば学部生向けのフィールドワーク実習は根本的な変更が余儀なくされている。大学院教育においても、フォールドワークによる調査の意義を再考しなければ、学位論文を執筆する院生への助言がままならない事態になっている。こうした現実に対応せざるをえない諸問題について様々な立場からの意見交換をすることで、今後の人類学フィールドワーク教育のあり方を展望することを目的とする。

８．次　第：
開催挨拶　山極壽一（日本学術会議会長、京都大学総長）
趣旨説明　高倉浩樹（日本学術会議第一部会員、東北大学東北アジア研究センター教授）

１．学部教育・大学院教育への影響と対応
上杉富之（日本学術会議連携会員、成城大学文芸学部教授）
丸山淳子（日本学術会議連携会員、津田塾大学学芸学部准教授）
安井眞奈美（日本学術会議連携会員、国際日本文化研究センター教授）
司会　窪田幸子（日本学術会議第一部会員、神戸大学大学院国際文化研究科教授）

２．フィールドワークを重視しない人類学教育はありうるのか？
曽我亨（日本学術会議連携会員、弘前大学人文社会学部教授）
野林厚志（日本学術会議連携会員、国立民族学博物館教授）
飯田玲子（日本文化人類学会会員、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科特定助教）

司会　高倉浩樹（同上）

閉会

９．関係部の承認の有無：　第一部承認

（下線の講演者は、主催分科会委員）

提案２２

公開シンポジウム「原子力総合シンポジウム」の開催について

１．主　催：日本学術会議総合工学委員会原子力安全に関する分科会

２．共　催：

一般社団法人 エネルギー・資源学会
公益社団法人 化学工学会
一般社団法人 環境放射能除染学会
公益社団法人 空気調和・衛生工学会
公益社団法人 計測自動制御学会
特定非営利活動法人 失敗学会
公益社団法人 地盤工学会
公益社団法人 電気化学会
一般社団法人 電気学会
一般社団法人 電子情報通信学会
公益社団法人 土木学会
公益社団法人 日本アイソトープ協会
公益社団法人 日本医学放射線学会
一般社団法人 日本応用地質学会
日本海水学会
日本海洋学会
公益社団法人 日本化学会
一般社団法人 日本核医学会
一般社団法人 日本機械学会
公益社団法人 日本気象学会
一般社団法人 日本原子力学会
一般社団法人 日本建築学会
一般社団法人 日本高圧力技術協会
一般社団法人 日本航空宇宙学会
公益社団法人 日本コンクリート工学会
日本混相流学会
公益社団法人 日本地震学会
一般社団法人 日本シミュレーション学会
公益社団法人 日本心理学会
公益社団法人 日本水産学会
公益社団法人 日本セラミックス協会
一般社団法人 日本地質学会
一般社団法人 日本電気協会
公益社団法人 日本農芸化学会
一般社団法人 日本非破壊検査協会
一般社団法人 日本複合材料学会
一般社団法人 日本物理学会
日本放射化学会
一般社団法人 日本放射線影響学会
日本保険学会
一般社団法人 日本保全学会
一般社団法人 日本溶接協会
一般社団法人 日本流体力学会
一般社団法人 日本ロボット学会
一般社団法人 プラズマ・核融合学会
一般社団法人 溶接学会
一般社団法人 レーザー学会

（50 音順）

３．後　援：

日本アーカイブズ学会
公益社団法人 日本技術士会

４．日　時：令和２年９月 30 日（水）13:00～17:10

５．場　所：オンライン開催

６．分科会等の開催：開催予定

７．開催趣旨：

原子力総合シンポジウムは、我が国の原子力について総合的に議論を行う場である。日本学術会議と関連学協会が協力し、各界の識者を交えて、これまで 50 年以上にわたり中長期的視点から議論が行われてきた。

東京電力福島第一原子力発電所の事故より来年で１０年となる今日においてもなお、避難を余儀なくされている方々が多数おられ、今後も廃炉と復興はもとより、原子力安全について長期に亘る継続的な努力が必要である。
そこで、今回の原子力総合シンポジウムにおいては、「2050 年の持続可能社会の実現にむけたシナリオと原子力学術の貢献」をテーマとして取り上げ、技術と社会の両面の視点からの議論を行う。その際、技術的な側面とともに、人文社会学的、社会心理学的側面の議論を行うことで、社会のニーズに応えられる原子力技術のありかたが議論されることを期待したい。上記テーマのもと、３つの論点について基調講演とパネル討論を行い、総合討論により課題の明確化、将来の方向性について議論する。

８．次　第：

全体進行：

柘植　綾夫(日本学術会議連携会員、公益社団法人日本工学会顧問・元会長)

13：00　開会挨拶

大倉　典子（日本学術会議第三部会員、芝浦工業大学名誉教授、中央大学大学院理工学研究科客員教授）

13：20　論点１：持続可能社会の実現にむけたシナリオ

司会：　上坂　充（日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授）

講演：　秋元圭吾（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE）システム研究グループリーダー・主席研究員）

14：10　論点２：エネルギーと環境との調和－イノベーションへの期待

司会：岡嶋　成晃（国立研究開発法人日本原子力研究開発機構原子力エネルギー基盤連携センターセンター長（日本原子力学会前会長））

講演：山口　彰（東京大学大学院工学系研究科原子力専攻教授）

14：50－15：10　（　休憩　）

15：10　論点３：エネルギーの確保－技術的要件と社会的要件

司会：松岡　猛（日本学術会議連携会員、宇都宮大学基盤教育センター非常勤講師）

講演：技術的要件：小宮山涼一（東京大学大学院工学系研究科原子力国際

専攻准教授）

社会的要件：野口　和彦（日本学術会議連携会員、横浜国立大学ＩＡＳリスク共生社会創造センター客員教授）

16：10－17：00　総合討論

モデレータ：

山地　憲治(日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE）副理事長・研究所長)

パネリスト：

秋元圭吾（日本学術会議連携会員、公益財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE）システム研究グループリーダー・主席研究員）

山口　彰（東京大学大学院工学系研究科原子力専攻教授）

野口　和彦（日本学術会議連携会員、横浜国立大学ＩＡＳリスク共生社会創造センター客員教授）

小宮山涼一（東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻准教授）

土田　昭司（関西大学教授社会安全学部教授、日本原子力学会理事、日本リスク研究学会前会長）

17：00　閉会挨拶

中島　健（一般社団法人日本原子力学会会長、京都大学複合原子力科学研究所副所長）

９．関係部の承認の有無：第三部承認

（下線の登壇者は、主催分科会委員）

※ 今後の状況によっては公開シンポジウムを中止・延期・開催方法変更の可能性あり

提案２３

※第 25 期案件（申請理由あり）

公開シンポジウム「複合災害への備えー with コロナ時代を生きる」の開催について

１．主　催：日本学術会議 防災減災学術連携委員会、土木工学・建築学委員会

２．共　催：防災学術連携体

３．後　援：なし

４．日　時：令和 2 年 10 月 3 日（土）13 時から 14 時 30 分

５．場　所：オンライン開催（予定）
　＊本案は、防災推進国民大会 2020（主催：内閣府、防災推進協議会、防災推進国民会議）の中の一企画案である。

６．委員会の開催：なし

７．開催趣旨：
　新型コロナウィルスの感染拡大は日本全国、全世界に及んでいる。感染症への対策は続けねばならず、この間に生じる自然災害によって起こる複合災害にも警戒が必要である。防災学術連携体（防災に関わる５８の学会が日本学術会議を要として集まった組織）は、沖縄の梅雨入りが近い５月１日に、市民への緊急メッセージ「感染症と自然災害の複合災害に備えてください」を発表した。
　日本は災害の多い国であり、南海トラフ地震、首都直下地震のみならず、気候変動の激化による豪雨災害にも備えねばならない。「with コロナの時代」に生きる私たちは、今後どのように複合災害に備えていくべきか。医療と看護、気象災害と地震災害、地理・地形と自然災害、都市・建築と社会活動、災害と安全、防災と先端技術などの分野の専門家が集まり、知恵を結集して議論する。

８．次　第：（下線の講演者等は、主催委員会委員）
　　総合司会　<u>和田　章（日本学術会議連携会員、東京工業大学名誉教授）</u>
13:00　趣旨説明　<u>米田雅子（日本学術会議第三部会員、慶應義塾大学環境・エネルギー研究センター特任教授）</u>
13:05　新型コロナ感染症との戦い　　日本災害医学会
13:20　気候変動と今年の風水害　　日本気象学会
13:35　ディスカッション「複合災害への備えー with コロナ時代を生きる」
　　コーディネータ　日本学術会議 防災減災学術連携委員会委員
　　パネリスト　　公募（防災減災学術連携委員会委員、防災学術連携体の５８学会）

パネリスト　　同
パネリスト　　同
パネリスト　　同
パネリスト　　同
14:30　閉会挨拶　　大友康裕（日本災害医学会代表理事、東京医科歯科大学教授、防災学術連携体代表幹事）

９．関係部の承認の有無：第三部承認

１０．申し込み方法・連絡先　　※調整中
○○　○○　（　所　属　）＜mail address＞
※オンライン開催なので締め切りはなし

※申請理由

開催主体である課題別委員会「防災減災学術連携委員会」の設置（2021 年 3 月末まで）を、次期に申し送りいただきたく、お願いいたします。

・日本学術会議は防災推進国民会議の構成機関のため、防災推進国民会議が主催団体の一部をなす「防災推進国民大会 2020」には日本学術会議としての参加が重要であると考えます。
・2016 年から始まった「防災推進国民大会」には、課題別委員会「防災減災学術連携委員会」とその前身の課題別委員会がプログラムを出展してきています。
2016 52 学会の結集による防災への挑戦　－ 熊本地震における取組み －
2017 衛星情報・地理情報と防災イノベーション／衛星情報・地理情報を防災に生かそう
2018 あなたが知りたい防災科学の最前線　－ 首都直下地震に備える －
2019 あなたが知りたい防災科学の最前線　－ 激化する気象災害に備える －
・これまでの実績を踏まえると、本年の「防災推進国民大会 2020」への出展についても、「防災減災学術連携委員会」が主体となって準備を進めていくことが必要と考えます。
・来期の会員・連携会員の２名以上が参加する体制の確保を見込んでいます（今期防災減災学術連携委員会の構成員から、24-25 期会員の米田雅子委員長、24-25 期連携会員の和田 章委員がシンポジウム参加予定）。

２）学術フォーラム（令和３年１月）の開催について

2021 年１月には学術フォーラム「東日本大震災の十年とこれから～５８学会、防災学術連携体の活動」を企画しております。５８学会とともに開催するためにはリードタイムが必要であるため、今期から準備を開始する必要があります。

このためにも、2021 年３月末までの委員会の設置期間の延長をお願いする次第です。

防災減災学術連携委員会委員長　米田　雅子

提案２４

公開シンポジウム「融合社会脳研究の発展へ向けて」の開催について

１．主　催：日本学術会議 心理学・教育学委員会、日本学術会議 心理学・教育学委員会「脳と意識」分科会

２．共　催：日本心理学会

３．後　援：なし

４．日　時：令和２年９月８日（火）公開（公開期間：令和３年１月 31 日（日）まで）

５．場　所：オンライン開催（事前に収録したものを公開するもの）

６．分科会等の開催：開催予定（なし）

７．開催趣旨： SDGs が謳われる現代社会で共同生活を営む人間にとって，社会脳の役割は一層重要になっているが，その脳内機構は未解明である。本シンポジウムは健全な社会性を生みだす脳の働きを文理融合的視点から深め，その基礎と展開研究を行う融合社会脳研究センター構想を進めるものである。生きていく時間の流れの中で生活している他者の心の想像や協力行動を担う脳の解明には，社会脳の解明が必要である。一方，新型コロナウイルス感染症予防から Stay Home が声高に叫ばれ他者との接触を断たれ，インターネット社会に依存する社会の中では，社会的ストレスや依存症などの社会不適応を生み出している。この不適応を予防し，心のレジリエンスを高め，社会性を回復するには，実験心理学を中心として他分野の学問と連携して「融合社会脳研究」を進める必要がある。本シンポジウムは日本学術会議「脳と意識」分科会が，融合社会脳の発展へ向けて開催するものである。

　なお，本公開シンポジウムは，当初の計画では 2020 年９月８日(火)、９日(水)、10 日(木)開催予定の日本心理学会第 84 回大会（東洋大学白山キャンパス）で公開シンポジウムとして開催する計画であった。それが新型コロナウイルス感染症予防の観点から Web 開催に変更された。

８．次　第：(Web 収録日での進行予定)

13：00　公開シンポジウムの進行説明
　　松井　三枝（日本学術会議第一部会員、金沢大学国際基幹教育院教授）

13：10　趣旨説明
　　苧阪　直行（日本学術会議連携会員、京都大学名誉教授）

13：20　講演Ⅰ
　　坂田　省吾（日本学術会議連携会員、広島大学大学院人間社会科学研究

科教授）

13：50　講演 II
高橋　阿貴（筑波大学人間系准教授）

14：20　講演 III
渡辺　茂（日本学術会議連携会員、慶應義塾大学名誉教授）

14：50　総合討論
（司会）松井　三枝（日本学術会議第一部会員、金沢大学国際基幹教育院教授）

15：00　閉会

９．関係部の承認の有無：第一部承認

（下線の講演者は、主催分科会委員）

提案２５

※１月の幹事会において承認済みの公開シンポジウムについて、オンライン形式での開催に変更することに伴い、シンポジウムの開催日時・構成等を変更するもの

公開シンポジウム「第 12 回基礎法総合シンポジウム：「移動・帰属・アイデンティティ―人の国際移動と国家の役割―」の開催について

１．主　催：日本学術会議法学委員会

２．共　催：基礎法系学会連合（日本法哲学会、日本法社会学会、法制史学会、比較法学会、民主主義科学者協会法律部会、比較家族史学会）

３．後　援：なし

４．日　時：令和２年１０月３１日（土）１３：００～１８：００

５．場　所：オンライン開催

６．分科会等の開催：なし

７．開催趣旨：「人」は古典的には権利義務の結節点であり、「国民」としてのアイデンティティを付与され、国家の管理に服する存在であった。しかしながら、人の国際移動の活発化によってこの前提は崩れ始めている。すなわち、国際的に移動する「人」は、人の移動を制御しようとする国民国家の移民法制を逆手に取りつつ、複数の国家にまたがる越境的な関係の中で自らの権利や自由を確保しようとしている。こうした現代的な現象を前に、「人の移動」という視点から、法学の基礎的概念である「人」、そして国家や市民社会の役割を再検討する。

８．次　第：

司会　　亀本　洋（日本学術会議第一部会員、明治大学法学部教授）
浅野　有紀（日本学術会議連携会員，同志社大学大学院法務研究科教授）

13：00：開会挨拶　佐藤　岩夫（日本学術会議第一部会員、東京大学社会科学研究所所長）

13：05：企画趣旨説明
大西　楠テア（専修大学法学部准教授）

第一部

13：30：　瀧川　裕英（立教大学法学部教授）
「国家と国境の意義」

14：00：　佐藤　団（京都大学大学院法学研究科准教授）
「ドイツ法制史における東方移民の実情」

14：30：　長谷川　貴陽史（首都大学東京法学部教授）
「移民の包摂と排除―国家の統合政策と市民社会の役割」
15：00：　松前　もゆる（早稲田大学文化構想学部准教授）
「ブルガリア女性ケアワーカーの国際移動」
15：30：　小畑　郁（名古屋大学大学院法学研究科教授）
「2018 年の入管法改正と国際人権」
16：00～16：20　休憩

第二部
16：２０　総合討論

１８：00　閉会

９．関係部の承認の有無：第一部承認

（下線の講演者は、主催委員会委員）

提案２６

公開シンポジウム「東北マリンサイエンス拠点形成事業と今後の水産研究のあり方
−豊かな海へ、科学の力で−」の開催について

１．主　催：日本学術会議食料科学委員会・農学委員会

２．共　催：東北マリンサイエンス拠点形成事業（TEAMS）・文部科学省

３．後　援：復興庁、宮城県、岩手県、女川町、大槌町、水産・海洋科学研究連絡協議会、日本水産学会、日本海洋学会、マリンバイオテクノロジー学会、日本水産増殖学会、水産海洋学会、日本付着生物学会、日本ベントス学会、日本魚類学会、日本プランクトン学会、日本藻類学会、日本水産工学会、日本海洋政策学会、全国漁業協同組合連合会（すべて予定）

４．日　時：令和２年１１月１３日（金）　13： 00〜17：30

５．場　所： 東京大学伊藤記念ホール（または日本学術会議講堂）

６．分科会の開催：開催予定なし

７．開催趣旨：2011 年 3 月 11 日に発生した地震と津波は、東北地方太平洋沿岸域における陸域の破壊、さらに破壊された家屋や重油などのあらゆる物質の海洋流出により、広い範囲で甚大な被害をもたらした。当初、海洋環境・海洋生態系の変化は沿岸域から沖合域、表層から深層までに及ぶと考えられたが、具体的な予想すらできない状態であった。

震災復興を果たすためにはその基幹産業である漁業復興が重要になる。そのためには漁業の基盤となる海洋環境・海洋生態系の変化を正確にとらえる必要がある。このために多くの海洋科学研究者がそれぞれの分野で広い地域にわたって調査研究を行ってきた。文部科学省も震災復興を目指して東北マリンサイエンス拠点形成事業を設置してその一翼を担い、それらの成果が蓄積されてきている。

これまでに震災による海洋環境・海洋生態系の変化が科学的に明らかにされてきた。この過程で漁業者も科学的調査研究に理解を示し、科学に対する考え方にも変化をもたらした可能性がある。さらに SDGs の理念を受けて科学的調査研究の結果をもとに、新たな水産業のあり方が考えられてきつつある。

東日本大震災から 10 年の歳月が経過しようとしている。日本政府は、震災後 5 年間を「集中復興期間」と位置付け、被災地の一刻も早い復旧・復興を目指し、それに続く 5 年間を「復興・創生期間」と位置づけ、10 年間の復興期間の「総仕上げ」に向かうとした。復興とは震災前に戻ることだけではな

く、国連防災世界会議の仙台宣言にあるようにBuild Back Better（より良い復興）を遂げることと考えられる、本シンポジウムにおいては、震災後に行われた震災復興にかかわる多くの科学的研究を基に、今後の水産研究の在り方について議論を行い、科学が社会にもたらすインパクトと貢献について思考することを目的とする。

８．次　第：(予定)

開会あいさつ

13:00-13:05 開会挨拶

日本学術会議副会長　渡辺 美代子（国立研究開発法人科学技術振興機構）

13:05-13:10

文部科学省局長または審議官

第1部　東北マリンサイエンス拠点形成事業

（座長：大越和加：日本学術会議連携会員・東北大学農学研究科）

13:10-13:15　プロジェクトの設立

文部科学省海洋地球課長　福井 俊英（文部科学省海洋地球課）

13:15-13:30　プロジェクトの組織と活動概要

木島明博（TEAMS 代表機関代表・東北大学農学研究科）

13:30-14:00　がれき+汚染モニタリング（環境モニタリング）

藤原義弘（海洋研究開発機構）

14:00-14:30　岩手県における復興研究例（サケ研究）

兵藤　晋（東京大学大気海洋研究所）

14:30-15:00　宮城県における復興研究例

原　素之（東北大学農学研究科）

15:00-15:30　持続的漁業に向けた生態系モデル

石川洋一（海洋研究開発機構）

15:30-15:50　休憩

第２部　今後の水産研究のあり方（豊かな海へ、科学の力で）

（座長：永田俊：TEAMS 副代表機関代表・東京大学大気海洋研究所）

15:50-16:20　（講演）巨大災害を踏まえた今後の水産研究（仮題）

中田　薫（日本学術会議連携会員・水産研究・教育機構理事）

16:20-17:20　パネルディスカッション

登壇者（座長以外アイウエオ順）

座長：松田　治（広島大学・文部科学省拠点委員会）

パネリスト

木島 明博（東北大学・TEAMS 代表機関代表）

木村 妙子（三重大学）

杉崎 宏哉（水産研究・教育機構東北区水産研究所）
古谷 研（日本学術会議第二部会員・創価大学）
17:20　閉会の挨拶　古谷　研
17:30　閉会

提案２７

公開シンポジウム「第 25 回 史料保存利用問題シンポジウム」開催について

１．主　催：日本学術会議史学委員会／日本学術会議史学委員会歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会

２．共　催： 日本歴史学協会

３．後　援：全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（予定）／日本アーカイブズ学会（予定）

４．日　時：令和２年 12 月 19 日（土）13：30～17：30

５．場　所：駒澤大学駒沢キャンパス　１号館１−２０２教場
※新型コロナウイルス感染症の影響によっては、開催形態を変更し、オンラインにより開催する場合がございます。

６．分科会等の開催：検討中

７．開催趣旨：日本歴史学協会と共同主催で、「続発する大災害から史料を守る―現状と課題―」をテーマとして、公開シンポジウムを開催することにした。趣旨は次の通りである。

趣　旨

阪神淡路大震災から 25 年、この間、東日本大震災をはじめとして大地震が頻発している。そして、地震のみならず火山噴火も多発し、豪雨による水害等、大きな災害に襲われ続けているのが、現在の日本列島の姿であるといえる。昨年の秋には台風 19 号にともなう豪雨によって、各地で河川の氾濫、破堤による洪水が発生し、大きな豪雨災害となった。19 号のみならず、その前後にも台風や大型低気圧の通過による風水災に見舞われたことは、なお記憶に新しい。こうした大災害の発生は、日常生活の破壊であるとともに、文化財や歴史資料等の消失・散逸の危機でもある。そうした危機に直面するなかで、レスキュー活動等が展開され、被災文化財や歴史資料等の救済・保全への努力が続けられてきた。

このように、地震・火山噴火のみならず、近年はこれまで想定できなかったような豪雨などによる大災害が、同時多発的にそれぞれの地域を襲い、都市部では都市部特有の被害も発生している。こうした現状を踏まえると、これまでの文化財や歴史資料等の保全・保存の在り方について、大災害の続発を前提に見直す必要性を痛感する。しばしば「想定外」が繰り返されるが、これは文化財や歴史資料等の管理・保全に関しても、甚大な被害への予防の対応ができていないことの表れといえよう。こうした現況に鑑み、日本歴史学協会では、昨年 11 月に「豪雨による被災文化財や歴史資料等の救済・保全についての緊急声明」を発した。

そこで今回のシンポジウムは、この声明を受けた取り組みとして位置づけることとし、昨秋の台風等による豪雨で被災した文化財・歴史資料等の救済・保全活動について、那珂川・久慈川、千曲川の各水系に関わる報告をしていただき、被災や救出活動の実態、その問題点などを共有するなかで、平時における文化財や歴史資料等の管理・保全の在り方、緊急時における速やかな救済・保全に向けた対応について、豪雨災害を通して考えたい。このことによって、続発する大災害に対応した文化財や歴史資料等の保全・保存の在り方を展望する機会としたい。

一方、実施に向けて検討が進められている国立公文書館によるアーキビスト認証制度について、その現状を検証することも喫緊の課題といえる。そこで、今回は特別報告と

して、国立公文書館によるアーキビスト認証制度に関する報告をお願いした。

例年 6 月の開催予定を、12 月延期いたしましたが、新型コロナウイルス感染症の影響によっては、開催形態を変更し、オンラインにより開催する場合がございます。

８．次　第：

開会挨拶　若尾政希（日本学術会議第一部会員、一橋大学大学院教授）

趣旨説明　佐藤孝之(日歴協史料保存利用特別委員会委員長)

報　告

高村恵美（茨城史料ネット／常陸大宮市文書館係長）

「2019 年台風 19 号による那珂川・久慈川流域の被災資料保全活動」

山本英二（信州資料ネット／信州大学教授）

「2019 年台風 19 号豪雨被害と信州資料ネット」

特別報告「(国立公文書館によるアーキビスト認証制度について)」

パネルディスカッション

パネリスト：斎藤　善之／高村　恵美／山本　英二

司会：大友一雄（日本学術会議連携会員／国文学研究資料館教授）

熊本史雄（駒澤大学教授）

コメント：久留島典子（日本学術会議第一部会員／東京大学史料編纂所教授）

閉会挨拶：中野達哉（日本歴史学協会委員長／駒澤大学教授）

９．関係部の承認の有無：第一部承認

（下線の講演者は、主催委員会・分科会委員）

プログラム

13：30～13：35　**開会挨拶**：**若尾政希**（日本学術会議会員　一橋大学教授）

13：35～13：40　**趣旨説明**：佐藤孝之(日歴協史料保存利用特別委員会委員長)

13：40～14：10　**第１報告**：高村恵美（茨城史料ネット／常陸大宮市文書館係長）
「2019 年台風 19 号による那珂川・久慈川流域の被災資料保全活動」

14：10～14：40　**第２報告**：山本英二（信州資料ネット／信州大学教授）
「2019 年台風 19 号豪雨被害と信州資料ネット」

14：40～14：50　**休　憩**

14：10～15：25

14：50～15：50　**特別報告**：(国立公文書館によるアーキビスト認証制度について)
15：50～17：25　**パネルディスカッション**
パネリスト：高村恵美　山本英二
司会：大友一雄（日歴協史料保存利用特別委員会幹事　日本学術会議連携会員）
熊本史雄（日歴協国立公文書館特別委員会委員長　駒澤大学教授）

コメント：久留島典子（日本学術会議会員　東京大学史料編纂所教授）

17：25～17：30　**閉会挨拶**：**中野達哉**（日本歴史学協会委員長　駒澤大学教授）